

第38回国際化学オリンピックの報告

—金メダル1名、銀メダル3名受賞— —2010年、日本で開催が決定—

国際化学オリンピックの成果

去る7月2日～11日、韓国・慶山で第38回国際化学オリンピックが盛大に開催された。世界67カ国から442名の参加があった。このうち、生徒255名が国際化学オリンピックの問題に挑戦した。昨年夏の全国高校化学グランプリと今年4月の最終選考会を経て選抜された4名の日本代表の生徒らは、今村麻子さん（私立神戸女学院高等学部3年）が金メダル、田中成君（私立開成高等学校2年）、永田利明君（私立開成高等学校3年）、服部陽平君（国立筑波大学附属駒場高等学校3年）の3名が銀メダルを受賞した。帰国後、文部科学省を表敬訪問した時、小坂憲次文部科学大臣からは、オリンピック参加者として初めて、表彰状が授与された。また、文部科学省小田公彦氏、経済産業省安居徹氏、田尻貴裕氏らからもご祝辞を頂いた。



写真1 表彰式直後。左から、永田利明君（銀メダル）、田中成君（銀メダル）、今村麻子さん（金メダル）、服部陽平君（銀メダル）。

プログラムの概要

さて、一行が旅立つ前、7月1日（土）には日本化学会で壮行会が開かれた。生徒らは、文部科学省田中正朗氏、経済産業省渡邊宏氏、そして（独）科学技術振興機構安部元泰氏らの来賓各位から激励を受け、文部科学大臣からは祝電を頂戴した。

翌2日（日）の午後1時50分、韓国航空で成田を出発、午後4時に釜山に到着。このとき、現地では、スタッフの大学生らが各国代表団を待っていた。私たち日本チームを受け持つことになった洪東和さんはきれいな京都弁を話し、最終日ま

で生徒らにつきっきりとなる。タイとロシアの団体と一緒に生徒の寄宿寮までバスで移動。その間、名札などが渡された。名札の色で、参加者の立場がすぐにわかる。午後6時半過ぎに嶺南大学に到着するも、大雨のためバスで待機。しかし、全員にカップが貸出されて移動し、登録手続きを済ませる。登録では不正防止のため誓約書などにサイン。結局生徒と別れたのが午後7時45分過ぎ。生徒らは急いで学食で夕食。付き添い者らは、バスで約1時間ほど離れたHyundaiホテルに移動。時間が遅かったので夕食は弁当となる。



写真2 釜山国際空港到着直後。左から、嶋田豊司（奈良工業高等専門学校）、渡部智博（立教新座中高）、渡辺正（東京大学）、市川朋美（森村学園）、洪東和（Hong Donghwa、日本チーム・スタッフ）、伊藤真人（創価大学）、今村麻子（私立神戸女学院高等学校）、田中成（私立開成高等学校2年）、服部陽平（国立筑波大学附属駒場高等学校3年）、永田利明（私立開成高等学校3年）。

3日（月）は慶山市民会館で開会式、嶺南大学で歓迎会。太鼓の音とともに始まったオープニングにはおおいに盛り上がる。そして、会場には、科学技術大臣（兼副首相）、大韓化学会会長、慶山市長、嶺南大学学長およびその他の官、学、産の代表が来賓として出席、国をあげての大きな行事に位置づけられていることがわかった。

その後は、生徒と付添い者らは別々のプログラムに参加する。生徒らはテコンドーなどの体験、MentorやScientific Observerは実験の試験会場の点検、実験問題の審査会、翻訳、Jury Meeting、そしてGuestらは茶道体験などから始まった。

オリンピック期間中、生徒らは、実験、筆記各5時間の試験の合間には様々な催しに参加。雨などでスケジュールが若干変更されることはあったものの、安東の河回民族村、遊園地、蔚山工業団地や慶州の見学、そして韓国の伝統的な餅つき体験など、メリハリのある忙しい毎日を過ごしていた。



写真3 試験が終了し、Gala Nightで懇談する生徒と関係者。

また、Mentorらのスケジュールも極めて忙しいものであった。実験問題に関する議論、翻訳、筆記問題に関する議論、翻訳、そして採点などが連日のように夜遅くまで続いた。Guestらは、これまでのオリンピックとは異なり、Mentorらの仕事とは一線を画すことが要求された。



写真4 翻訳会場。右手前から渡辺正教授、伊藤真人教授。

Mentorは、大学の教員、教育省の役人、高校教員、そして元・国際化学オリンピックに参加したという大学院生まで幅広い。一方、Guestには、Mentorと同じような立場の人だけでなく、企業関係者やMentorの家族、そして生徒の保護者らが含まれていた。

各国の事情

いくつかの事例を紹介する。例えば、中国は好き嫌いに問わず地域ごとの選抜に全ての高校生が受験、マレーシアでは教育省から全国の高校に直接手紙を送り約1万人が国内選抜に参加、ベトナムでは約700名の生徒が国内選抜に参加し、2回の試験で選考するなど、各国の状況に応じて様々な手続きで生徒を選んでいる。選ばれた生徒であるが、スペインのようにオリンピックの選抜試験と大学の入学試験を完全に切り離している国、中国のように4名全員が北京大学に進学が決まっている国、台湾では2名が台湾医科大学、2名がアメリカのMITに決まっているなど様々である。なお、台湾医科大学

やMITの物理への入学予定者は、それぞれ国際生物オリンピックや国際物理オリンピックで1名ずつ金メダルを受賞しているとのこと。また、タイのように、各国の事情を知るため簡単なアンケートを用意していた国もあり、各国の教育事情を知る格好の機会であった。



写真5 生徒の実験台の点検。

オリンピックの運営

特に印象深かったのは、韓国の受け入れ態勢である。スタッフの大学生らは全国の大学に公募し、その中から選抜された者で構成されていた。語学力はもちろんのこと、意識の高さと全ての場面での心配りには目を見張るものがあった。また、試験問題に関わる議論などは、限られた時間の中で物事をまとめていかなければならなかったが、各国の意見を的確に処理する大学の先生方の様子は見事であった。韓国政府や化学業界はもちろん、製鉄会社POSCOやHyundai, Daewooなど国を代表する諸企業の全面的な協力が随所に見受けられた。

本大会で、2010年には日本で国際化学オリンピックを開催することが決まり、日本化学会でロゴの募集が始まった。これほど多数の国々から参加者のある国際的な行事であるからこそ、本学会の会員各位の協力はもちろん、関係省庁や企業などからも幅広く協力をおおぐが必要である。日本が正式に参加して4回目だが、日本での大会を成功裡に導くよう、各方面との協議を始めなければならない。

最後に、韓国の大会関係者はじめ、関係各位へ感謝の意を表し、筆をおきたい。

参考となるサイト

- 1) <http://icho2006.kcsnet.or.kr/>
- 2) <http://icho.csj.jp/>

文責：渡部智博（化学グランプリ・オリンピック委員会 委員）
38回 IChO 韓国大会 日本役員団
Head Mentor 伊藤真人（創価大学）、Mentor 渡辺正（東京大学）、Scientific Observer 嶋田豊司（奈良工業高等専門学校）、Guest 渡部智博（立教新座中高）、Guest 市川朋美（森村学園）